

4 実践事例

(1) [実践事例1]

PROGRAM 7 The Wonderful Ocean (*Sunshine 1*) における授業改善の視点

学校教育における英語リーディング指導の課題の1つに、教科書本文の内容をどのように生徒に深く理解させ、本文内容をもとにどのように生徒の意見や考えを英語で表現させるかということが挙げられます。その課題を克服するために、読解指導において教師が発問を効果的に活用することが指導方策の1つと考えます。読解発問は、事実発問、推論発問、評価発問の3つのタイプに分けられます。

- ・ 事実発問・・・本文上に直接書かれた情報を読み取らせる発問。
- ・ 推論発問・・・本文上には直接示されていない内容を本文情報と読者の背景知識から推測させる発問。
- ・ 評価発問・・・本文情報に対する読み手の考えや態度を表明させる発問。

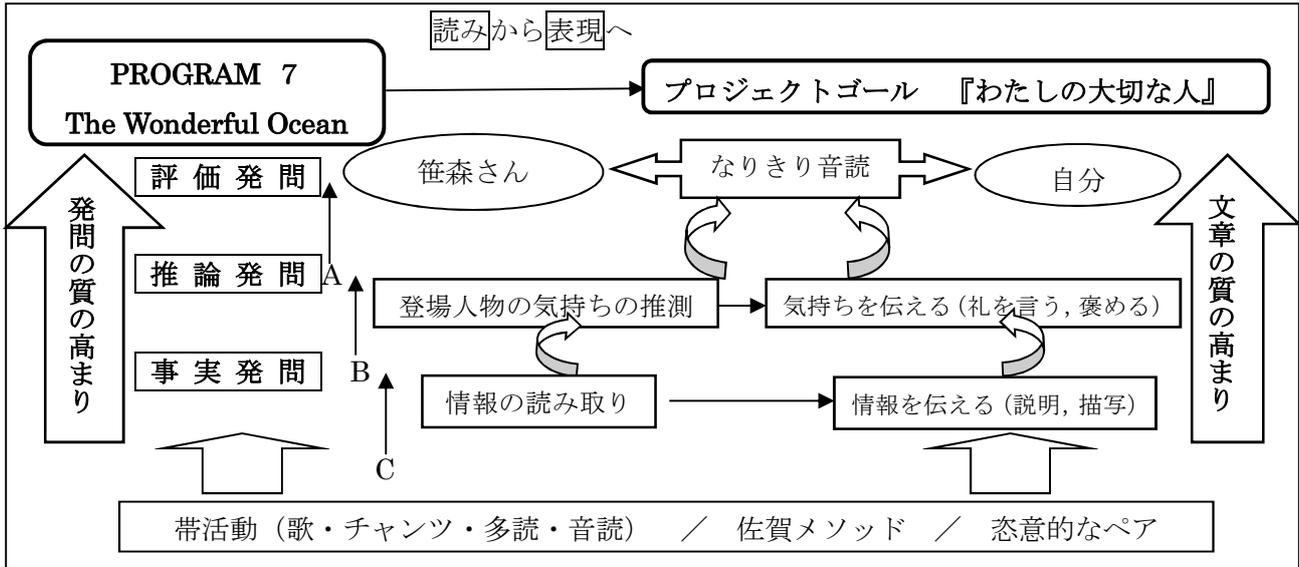
これらの発問の中でも、特に推論発問及び評価発問には、生徒から異なる解釈や考え方を引き出す特徴があることから、本文情報を読む生徒の動機を高める、生徒の読みを深く豊かにする、生徒同士の協働学習を促すなどといった、読解指導における様々な可能性があると考えられます。

① 発問構成発問を軸とした単元構成

PROGRAM 7における発問を以下のように設定します。

Pre-reading	<ul style="list-style-type: none"> ・ Teacher Talkや写真などで興味をもたせ、本文の内容をつかみやすくさせる。 ・ 生徒とのInteractionの中で海洋動物や笹森さんに関するキーワードや写真の質問に答えさせ、情報を整理させる。
While-reading	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒とのInteractionの中で本文に関する質問に答えさせたり、シャチやイルカの情報を整理させたりする【事実発問】。 ・ 笹森さんの思いを読み取らせ、笹森さんの活動目的やメッセージを推測させる【推論発問】。
Post-reading	<ul style="list-style-type: none"> ・ ガイド文ワークシートにオリジナルの文を追加させることで、笹森さんの立場になって、考えを表現させる【評価発問】。

② 発問とプロジェクトゴールとの相関関係



③ PROGRAM 7での発問の高まり

事実発問(本文に書かれている情報の整理)から推論発問(登場人物の気持ちの推測など)へと、それらを評価発問(ガイド文にオリジナル文を加える)まで高めていきます。

④ PROGRAM 7とプロジェクトゴール『わたしの大切な人』のつながり

- ア 読みの指導において、事実発問を行うことで説明文の大切な部分などを正確に読み取らせ、読み取った情報を整理しながらまとめる言語活動を行います。プロジェクトゴールで他者紹介を行う際に、その人物に関する情報をまとめ、いきいきとした描写ができるようになると考えます。
- イ 推論発問により、登場人物の気持ちを推測させたり、本文には明記されていないメッセージ等を読み取らせたりします。また、読み取った内容が表現されるよう、登場人物になりきって音読をさせます。このような言語活動を仕組むことで、聞き手を意識したより効果的な発表ができます。
- ウ 登場人物の気持ちや書き手のメッセージに関する推測を基に、本文にオリジナル文を追加させ、説明文の情報量を増やす活動を行います。既習事項の3人称・単数・現在や本単元で学習する人称代名詞目的格を用いることは、他者に関する情報をさらに多く表現できる機会となり、また、まとまりのある英文の産出につながります。また、Who/When 疑問文を用いて、聞いたり読んだりしたことなどについて、相互に問答し合うこともできるようになります。

⑤ 普通の授業を支えるものとして

これら③④のような活動を支えるものとして、普通の授業で取り入れている帯活動や佐賀メソッド、さらに2学期から実施している恣意的なペアによる教え合いがあります。帯活動では、既習事項を用いたミニ会話を行うことにより、既習事項の定着だけでなく、相手の応答に反応することで会話を続けようとする力も付けるようにしています。また、音読を多く行うことで、読むことへの苦手意識を減らし、読みに慣れさせています。また、本学級は、学び合いの充実を図るために、アンケート、定期試験の結果を基に2学期より恣意的な座席で授業を行っています。前後左右ともに英語が得意な生徒と苦手な生徒の組み合わせになっており、英語が苦手な生徒に教えることで考えや知識を整理したり、英語が得意な生徒に教えてもらうことで苦手を克服したりするねらいがあります。